

# 量子物理学特論

第9回

# 量子力学の基本的性質

- ★ 量子力学的演算子の物理的意味を学ぶ
- ★ 線形なエルミート演算子を物理量に対応させる

# 物理量とエルミート演算子

- ★ 量子力学では、測定される物理量に対応した演算子を用意する。
- ★ 演算子を波動関数とその複素共役で挟んで、全空間で積分することで、物理量が期待値として得られる。

$$\langle A \rangle = \int \psi^* \hat{A} \psi d^3 r$$

物理量は実数であるから、 $\langle A \rangle = \langle A \rangle^*$      $\langle A \rangle^* = \int (\hat{A} \psi)^* \psi d^3 r$

$$\int \psi^* \hat{A} \psi d^3 r = \int (\hat{A} \psi)^* \psi d^3 r \text{ が必要}$$

このような関係を満たす演算子をエルミート演算子という

# 例：運動量演算子

$\hat{p} = \frac{\hbar}{i} \vec{\nabla}$  がエルミート演算子であることを確認する

$$\int \psi^* \hat{p} \psi d^3 r = \frac{\hbar}{i} \int \psi^* \vec{\nabla} \psi d^3 r$$

部分積分して，表面項を落とす。

$$\frac{\hbar}{i} \int \psi^* \vec{\nabla} \psi d^3 r = -\frac{\hbar}{i} \int (\vec{\nabla} \psi^*) \psi d^3 r = \int \left( \frac{\hbar}{i} \vec{\nabla} \psi \right)^* \psi d^3 r$$

確かにエルミート演算子の定義を満たしている。

# エルミート演算子の性質

$\psi_1, \psi_2$ が2乗可積分な任意の関数であるとする。

$\psi = \psi_1 + \lambda\psi_2$  も2乗可積分。i.e.  $\int \psi^* \psi d^3r$  が有限に収束

エルミート演算子に対して、

$$\int (\psi_1^* + \lambda^* \psi_2^*) \hat{A} (\psi_1 + \lambda \psi_2) d^3r = \int (\hat{A} \psi_1 + \lambda \hat{A} \psi_2)^* (\psi_1 + \lambda \psi_2) d^3r$$

また  $\int \psi_i^* \hat{A} \psi_i d^3r = \int (\hat{A} \psi)^* \psi d^3r$  より

$$\lambda^* \left[ \int \psi_2^* \hat{A} \psi_1 d^3r - \int (\hat{A} \psi_2)^* \psi_1 d^3r \right] \longleftarrow \text{両方とも0}$$

$$+ \lambda \left[ \int \psi_1^* \hat{A} \psi_2 d^3r - \int (\hat{A} \psi_1)^* \psi_2 d^3r \right] = 0$$

が任意の $\lambda$ に対して成り立つ。

# エルミート演算子の性質

以上から，次が成り立つ。

$$\int \psi_2^* \hat{A} \psi_1 d^3 r = \int (\hat{A} \psi_2)^* \psi_1 d^3 r$$

この関係式をエルミート演算子の定義式とすることも多い

# 線形代数の復習

エルミート行列：  $A^\dagger = A$

$$A_{ij}^* = A_{ji} \quad \text{対応} \quad \longleftrightarrow \quad \int \psi_2^* \hat{A} \psi_1 d^3 r = \int (\hat{A} \psi_2)^* \psi_1 d^3 r$$

エルミート行列の固有値は実数になる

$$A = U \Lambda U^\dagger \quad \Lambda_{ij} = \lambda_i \delta_{ij}$$

ユニタリー行列：  $U^\dagger U = U U^\dagger = I$

固有値の絶対値は1

# エルミート共役な演算子

任意の演算子  $\hat{A}$  に対して,

$$\int (\hat{A}\psi_2)^* \psi_1 d^3r = \int \psi_2^* \hat{A}^\dagger \psi_1 d^3r$$

を満たす  $\hat{A}^\dagger$  を  $\hat{A}$  に対する **エルミート共役** な演算子という

- 任意の演算子に対し,  $(\hat{A}\hat{B})^\dagger = \hat{B}^\dagger \hat{A}^\dagger$
- 2つのエルミート演算子  $\hat{A}$ ,  $\hat{B}$  が可換であれば, その積もエルミートである。
- 一般に,  $\hat{A}$  と  $\hat{B}$  が線形でエルミートな演算子であれば,  
$$\frac{1}{2}(\hat{A}\hat{B} + \hat{B}\hat{A}) \quad i(\hat{A}\hat{B} - \hat{B}\hat{A})$$
も線形でエルミートである。



# エルミート演算子の性質

エルミート演算子  $\hat{A}$

$$U = e^{i\hat{A}} = \hat{E} + i\hat{A} + \frac{(i\hat{A})^2}{2!} + \dots + \frac{(i\hat{A})^n}{n!} + \dots$$

↑  
恒等演算子

$$\hat{A}^\dagger = \hat{A} \quad (\hat{A}^n)^\dagger = (\hat{A}^\dagger)^n = \hat{A}^n \quad \text{だから}$$

$$\begin{aligned} U^\dagger &= (e^{i\hat{A}})^\dagger = \hat{E} - i\hat{A} + \frac{(-i\hat{A})^2}{2!} + \dots + \frac{(-i\hat{A})^n}{n!} + \dots \\ &= e^{-i\hat{A}} \end{aligned}$$

すなわち,  $U^\dagger U = 1$  であるので,  $U$  はユニタリー。

# エルミート演算子の固有値

物理量Aの測定における統計的分布のゆらぎを考える。

$$\Delta A = a - \langle A \rangle \quad \longrightarrow \quad \Delta \hat{A} = \hat{A} - \langle A \rangle$$

演算子

$$\begin{aligned} \langle (\Delta \hat{A})^2 \rangle &= \int \psi^* (\Delta \hat{A}) (\Delta \hat{A}) \psi d^3 r \\ &= \int ((\Delta \hat{A}) \psi)^* (\Delta \hat{A}) \psi d^3 r = \int |(\hat{A} - \langle A \rangle) \psi|^2 d^3 r \geq 0 \end{aligned}$$

偏差の2乗平均

ゆらぎがなく，Aの値がはっきり決まるのは， $(\hat{A} - \langle A \rangle) \psi = 0$   
すなわち， $\hat{A} \psi = a \psi$  の場合のみ。

# エルミート演算子の固有値

$$\hat{A}\psi = a\psi$$

固有値 ←  $a$  ← 固有関数(固有ベクトル)

一般に，この関係が満たされるのは，物理量Aのある値に対してだけであり，その値は連続的な値の場合もあれば，とびとびの離散的な値の場合もある。

固有値全体のことを，対応する演算子の**スペクトル**とよぶ

# 固有値と量子数

固有値 $a$ に対応する固有関数を $\psi_a$ と書く

$$\hat{A}\psi_a = a\psi_a$$

固有値がとびとびの値を持つ場合であれば,  $i=1,2,\dots$ として

$$\hat{A}\psi_i = a_i\psi_i$$

のように番号づけをすることができる。

固有値と固有関数を決める整数 $i$ のことを**量子数**とよぶ。

# 物理量と演算子

$$\hat{A}\psi_a = a\psi_a$$

状態 $\psi_a$ で物理量 $A$ を測定すると、確実に $A=a$ という決まった値になる（ゆらぎはない）。

演算子のどの固有関数とも一致しない波動関数によって、状態が記述されている場合は、物理量 $A$ の測定に対して、様々な値が得られるが、そのいずれも $\hat{A}$ の固有値のどれかに必ず一致している。

# 離散スペクトル

1次元のシュレディンガー方程式を考える。

$$\hat{H}\phi_E(x) = E\phi_E(x)$$

次が成り立つ場合に注目する。  $\int \phi_E^*(x)\phi_E(x)dx < \infty$

$E$ の近傍 $E+\delta E$ に対する固有関数があったとすると、

$$\hat{H}\phi_{E+\delta E}(x) = (E + \delta E)\phi_{E+\delta E}(x)$$

$\phi_{E+\delta E}(x) = \phi_E(x) + \delta\phi_E(x)$  のように、微小量で展開する

$$\hat{H}\delta\phi_E(x) = \delta E\phi_E(x) + E\delta\phi_E(x)$$

左から  $\phi_E^*(x)$  をかけて積分する。

# 離散スペクトル

$$\int \phi_E^*(x) \hat{H} \delta \phi_E(x) dx = \delta E \int \phi_E^*(x) \phi_E(x) dx + E \int \phi_E^*(x) \delta \phi_E(x) dx$$

||

$$E \int \phi_E^*(x) \delta \phi_E(x) dx$$

ゆえに  $\delta E \int \phi_E^*(x) \phi_E(x) dx = 0$  であり、

$$\int \phi_E^*(x) \phi_E(x) dx < \infty \text{ の場合には } \delta E = 0$$

---

つまり、 $E$ の近傍には別な固有値は存在せず、スペクトルが離散的になる

# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

演算子 $\hat{A}$ が縮退のない離散的スペクトルをもつ場合を考える

$$\hat{A}\phi_i = a_i\phi_i$$

演算子のエルミート性などから，このような場合の性質を調べる

**性質1** 固有値 $a_i$ は実数である

$$\int \phi_i^* \hat{A}\phi_i d^3r = a_i \int \phi_i^* \phi_i d^3r$$

演算子のエルミート性から両辺とも実数



# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

## 性質2 固有関数の直交規格化性

$$\hat{A}\phi_j = a_j\phi_j$$

$$\int (\hat{A}\phi_j)^* \phi_i d^3r - \int \phi_i^* \hat{A}\phi_j d^3r = \int \phi_j^* \hat{A}\phi_i d^3r - \int \phi_i^* \hat{A}\phi_j d^3r$$

$$a_i \neq a_j \text{ の場合 } \int \phi_i^* \phi_j d^3r = 0 \quad \begin{array}{l} = (a_i - a_j) \int \phi_i^* \phi_j d^3r \stackrel{\uparrow}{=} 0 \\ \text{エルミート性} \end{array}$$

これは、異なる固有値の固有関数が直交することを示す

$$\int \phi_i^* \phi_i d^3r < \infty \text{ なので, } \int \phi_i^* \phi_i d^3r = 1 \text{ と規格化すると}$$

$$\int \phi_i^* \phi_j d^3r = \delta_{ij}$$

# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

固有値 $a_i$ の固有関数が $n$ 重に縮退する場合

$$\hat{A}\phi_{il} = a_i\phi_{il} \quad (\ell = 1, 2, \dots, n)$$

一般には，これら $n$ 個の固有関数は互いに直交しない

しかし，適当な線形結合をとりなおすことで， $n$ 組の直交する固有関数のセットを作ることができる。

シュミットの直交化法にならう

# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

例として2重縮退の場合を考える。

$$\hat{A}\phi_{i1} = a_i\phi_{i1} \quad \hat{A}\phi_{i2} = a_i\phi_{i2}$$

$$\int \phi_{i1}^* \phi_{i1} d^3r = \int \phi_{i2}^* \phi_{i2} d^3r = 1 \quad \int \phi_{i1}^* \phi_{i2} d^3r = K \neq 0 \text{ とする}$$

$$\phi'_{i2} = \frac{\phi_{i2} - K\phi_{i1}}{\sqrt{1+K^2}} \text{ とすると, } \int \phi_{i1}^* \phi'_{i2} d^3r = 0 \text{ 直交化できた!}$$
$$\int \phi_{i2}'^* \phi'_{i2} d^3r = 1$$

この時、次の関係式も維持される。  $\hat{A}\phi'_{i2} = a_i\phi'_{i2}$

# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

## 性質3 直交規格化された固有関数による展開

演算子  $\hat{A}$  の固有関数全体が完全系をなしている場合、  
任意の波動関数を次のように展開できる

$$\psi(\vec{r}) = \sum_i c_i \phi_i(\vec{r}) \quad \hat{A}\phi_i = a_i \phi_i$$

直交規格化の条件より、 $c_i = \int \phi_i^* \psi d^3 r$

$$\text{ゆえに} \quad \langle A \rangle = \sum_i a_i \underset{\uparrow}{|c_i|^2} \quad \int \psi^* \psi d^3 r = \sum_i |c_i|^2 = 1$$

物理量Aの測定値として  $a_i$  が得られる確率

# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

## 性質4 完全性について

固有値が実数であり，固有関数系が完全系をなす演算子を観測可能量という

↑  
任意の関数系を展開できる

固有関数の組が揃っていること

$$\psi(\vec{r}) = \sum_i \left[ \int \phi_i(\vec{r}')^* \psi(\vec{r}') d^3 r' \right] \phi_i(\vec{r})$$

和と積分の順序を入れ替える

$$\psi(\vec{r}) = \int \psi(\vec{r}') \left[ \sum_i \phi_i(\vec{r}) \phi_i^*(\vec{r}') \right] d^3 r'$$

# 固有関数の性質：離散スペクトルの場合

$$\psi(\vec{r}) = \int \psi(\vec{r}') \left[ \sum_i \phi_i(\vec{r}) \phi_i^*(\vec{r}') \right] d^3 r'$$

比較  $\updownarrow$

$$\psi(\vec{r}) = \int \psi(\vec{r}') \delta(\vec{r} - \vec{r}') d^3 r'$$

**$\psi$ は任意の関数であることに注意**

$$\sum_i \phi_i(\vec{r}) \phi_i^*(\vec{r}') = \delta(\vec{r} - \vec{r}') \quad \text{固有関数の完全性を表す関係式}$$

# 離散スペクトルの性質

★ 固有値が実数である  $\hat{A}\phi_j = a_j\phi_j$

★ 直交規格化された固有関数を選ぶ

$$\int \phi_i^* \phi_j d^3r = \delta_{ij}$$

★ 完全系をなす固有関数を用意すると，任意の波動関数を展開可能

$$\psi(\vec{r}) = \sum_i c_i \phi_i(\vec{r}) \quad c_i = \int \phi_i^* \psi d^3r \quad \langle A \rangle = \sum_i a_i |c_i|^2$$

★ 完全性を表す関係式  $\sum_i \phi_i(\vec{r}) \phi_i^*(\vec{r}') = \delta(\vec{r} - \vec{r}')$

# 連続スペクトルの場合

離散スペクトルの場合と異なり，固有関数が2乗可積分とは限らない

例：
$$\frac{\hbar}{i} \vec{\nabla} \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) = \vec{p} \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) \longrightarrow \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) = C_{\vec{p}} e^{i \frac{\vec{p} \cdot \vec{r}}{\hbar}}$$

$$\int |\phi_{\vec{p}}(\vec{r})|^2 d^3 r = |C_{\vec{p}}|^2 \int d^3 r \quad \text{発散！}$$

そもそもこの波動関数は無限遠への運動に対応



無限遠で波動関数が0にならない

連続スペクトルの場合の固有関数の性質を調べる



# 固有関数による展開

$$\hat{A}w_\alpha = \alpha w_\alpha$$

この固有関数 $w_\alpha$ を用いて，任意の波動関数を展開する

$$\psi(\vec{r}) = \int c(\alpha)w_\alpha(\vec{r})d\alpha \quad \longleftarrow \quad \psi(\vec{r}) = \sum_i c_i \phi_i(\vec{r})$$

$$\langle A \rangle = \int \psi^* \hat{A} \psi d^3 r = \int \alpha |c(\alpha)|^2 d\alpha \quad \text{を要求すると}$$

$$\int \psi^*(\vec{r})\psi(\vec{r})d^3 r = \int |c(\alpha)|^2 d\alpha = 1 \quad \longleftarrow \quad \sum |c_i|^2 = 1$$

係数の解釈 : 物理量Aの値が， $(\alpha, \alpha + d\alpha)$  にある確率が $|c(\alpha)|^2 d\alpha$

直交規格化条件:  $\int w_{\alpha'}^*(\vec{r})w_{\alpha''}(\vec{r})d^3 r = \delta(\alpha' - \alpha'')$   $\alpha' = \alpha''$  で発散

$$c(\alpha) = \int w_\alpha^*(\vec{r})\psi(\vec{r})d^3 r$$

# 例：運動量の固有関数

$$\frac{\hbar}{i} \vec{\nabla} \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) = \vec{p} \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) \longrightarrow \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) = C_{\vec{p}} e^{i \frac{\vec{p} \cdot \vec{r}}{\hbar}}$$

これを規格化する。

$$\int \phi_{\vec{p}'}^*(\vec{r}) \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) d^3 r = C_{\vec{p}'}^* C_{\vec{p}} \int e^{\frac{i}{\hbar} (\vec{p} - \vec{p}') \cdot \vec{r}} d^3 r = (2\pi\hbar)^3 |C_{\vec{p}}|^2 \delta^{(3)}(\vec{p} - \vec{p}')$$

$$\delta^{(3)}(\vec{x}) = \frac{1}{(2\pi)^3} \int e^{i\vec{x} \cdot \vec{k}} d^3 k$$

$$(2\pi\hbar)^3 |C_{\vec{p}}|^2 = 1 \text{ より } |C_{\vec{p}}|^2 = \frac{1}{(2\pi\hbar)^3}$$

$$C_{\vec{p}} \text{ が全て正の実数であるとするとき, } \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) = \frac{1}{(2\pi\hbar)^{3/2}} e^{i \frac{\vec{p} \cdot \vec{r}}{\hbar}}$$

# 例：位置の固有関数

$$\hat{x}\phi_{\vec{x}}(\vec{r}) = \vec{x}\phi_{\vec{x}}(\vec{r})$$

$$\langle \vec{x} \rangle = \int \phi_{\vec{x}}^*(\vec{r}) \vec{r} \phi_{\vec{x}}(\vec{r}) d^3 r = \vec{x}$$

$\phi_{\vec{x}}(\vec{r}) = \delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{x})$  とすると上記の関係式が成り立つ。また、

$$\int \phi_{\vec{x}'}(\vec{r})^* \phi_{\vec{x}}(\vec{r}) d^3 r = \int \delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{x}') \delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{x}) d^3 r = \delta^{(3)}(\vec{x}' - \vec{x})$$

となり、直交規格化条件を満たす。

$$\phi_{\vec{x}}(\vec{r}) = \delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{x})$$

# 完全性

$$\psi(\vec{r}) = \int c(\alpha) w_{\alpha}(\vec{r}) d\alpha \quad \int w_{\alpha'}^*(\vec{r}) w_{\alpha''}(\vec{r}) d^3 r = \delta(\alpha' - \alpha'')$$

とすると,  $c(\alpha) = \int w_{\alpha}^*(\vec{r}) \psi(\vec{r}) d^3 r$

$$\psi(\vec{r}) = \int \left\{ \int w_{\alpha}^*(\vec{r}') \psi(\vec{r}') d^3 r' \right\} w_{\alpha}(\vec{r}) d\alpha$$

$$= \int \psi(\vec{r}') \left\{ \int w_{\alpha}(\vec{r}) w_{\alpha}^*(\vec{r}') d\alpha \right\} d^3 r'$$

$\delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{r}')$

ここから完全性条件  $\int w_{\alpha}(\vec{r}) w_{\alpha}^*(\vec{r}') d\alpha = \delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{r}')$  を得る

これが満たされていれば, 任意の関数は固有関数で展開できる

# 例：運動量固有関数

$$\phi_{\vec{p}}(\vec{r}) = \frac{1}{(2\pi\hbar)^{3/2}} e^{i\frac{\vec{p}\cdot\vec{r}}{\hbar}}$$

$$\int \phi_{\vec{p}}(\vec{r}) \phi_{\vec{p}'}^*(\vec{r}') d^3 p = \frac{1}{(2\pi\hbar)^3} \int e^{\frac{i\vec{p}\cdot(\vec{r}-\vec{r}')}{\hbar}} d^3 p = \delta^{(3)}(\vec{r}-\vec{r}')$$
$$\delta^{(3)}(\vec{x}) = \frac{1}{(2\pi)^3} \int e^{i\vec{x}\cdot\vec{k}} d^3 k$$

となり，完全性条件を満たしている。

# 一般の場合

離散スペクトルと連続スペクトルの両方を持つ演算子もある

このような場合には、

$$\psi(\vec{r}) = \sum_i c_i \phi_i(\vec{r}) + \int c(\alpha) w_\alpha(\vec{r}) d\alpha$$

$$\sum_i |c_i|^2 + \int |c(\alpha)|^2 d\alpha = 1$$

なお、離散スペクトルの固有関数と、連続スペクトルの固有関数は直交する。

完全性の条件は、

$$\sum_i \phi_i(\vec{r}) \phi_i^*(\vec{r}') + \int w_\alpha(\vec{r}) w_\alpha^*(\vec{r}') d\alpha = \delta^{(3)}(\vec{r} - \vec{r}')$$

# 複数の物理量

ある状態において，複数の物理量の値が確定する条件を考える。

物理量Aの値が確定する場合  $\hat{A}\psi_{ab} = a\psi_{ab}$

物理量Bの値も確定する場合  $\hat{B}\psi_{ab} = b\psi_{ab}$

容易に次が示せる  $(\hat{A}\hat{B} - \hat{B}\hat{A})\psi_{ab} = 0$

この関係式が，完全系をなす全ての固有関数に対して成り立つとすると， $\hat{A}\hat{B} - \hat{B}\hat{A} = [\hat{A}, \hat{B}] = 0$

交換関係が成立

この条件は，2つの物理量が常に確定するために必要

# 複数の物理量

また，逆に次が成り立つ。(証明は省略)

$\hat{A}$  と  $\hat{B}$  が2つの交換するエルミート演算子である場合，  
共通の固有関数のセットを選ぶことができる。

つまり，
$$\hat{A}\psi_a = a\psi_a \quad [\hat{A}, \hat{B}] = 0$$

とすると， $\psi_a$  が  $\hat{B}$  の固有関数になるようにすることが常に可能